市民的共感をベースに下からの教育改革を

―外国の学校から考える「楽しい学校」づくり―

深谷　昌志
尚美学園短期大学教授

澤野由紀子
国立教育研究所生涯学習研究部主任研究官

馬居　政幸
静岡大学教授

1●学校を「楽しく」する要素

澤野　はじめに国際比較調査の対象をどのような基準で選ばれるのか、お話しいただけますでしょうか。

深谷　私の場合、結果的に国際比較調査を始めることになったのです。日本の子どもの問題を考えていくときに、別の社会とどんなところが違っているか調べようとして、まず第一に気になったアメリカの学校をみたい、次には韓国をみてみたいというようにして、いろいろな社会や学校を訪ねているうちに、それぞれの社会に特有の学校があることがわかってきました。

　僕が特に関心があるのは小学校です。高校は社会の中に置かれた位置によって、かなり貧しい国でも立派なものがつくれますが、小学校は国の津々浦々にあるのでぼろが隠せません。だから、いかにもその国らしい学校があり、おもしろくなってずいぶんみてきました。

澤野　今まで調査などで訪問されて、「楽しい学校」として特に印象に残った所はありますか。

深谷　僕は、学校は本来楽しくはないと思っているのです。例えば、ディズニーランドが楽しいというような意

味で学校が楽しいことは絶対にありえません。ここでいう「楽しさ」は、子どもたちが充足感や自信がもてるといった意味での楽しさだろうと思います。

僕は日本育ちですから日本の学校しか知らずにアメリカの学校を見学したわけです。子どもたちが伸び伸びしていて、割に自由に動いている。小学校なのに日本の幼稚園のような感じがしました。ヨーロッパは地域や社会によって違いますが、子どもたちが伸び伸びできる学校があると思うようになりました。

澤野　子どもたちが伸び伸びでき、学校を楽しいと感じられる要素にはどんなものがあるとお考えですか。

深谷昌志氏

深谷　韓国などアジア系の学校はどこもそうなのですが、日本の学校も知識を伝達するという意味では、非常によく機能しています。どんな貧しい家の子どもでも、学校に行けば最低限の学力はつけられる。これはこれで望ましい学校の一つの形だと思います。

アメリカの学校は、はじめ伸び伸びしたところや明るさに引かれたのですが、いろいろみていくうちに「あれっ」と感じるようになりました。元気に意欲的にやっている子どもに先生は目をかけるのですが、勉強に関心のない子どもに対してはきわめて冷たいのです。今、アメリカで学力の低下が問題になっていますが、アメリカの学校を平均的にみてみれば理由はよくわかります。

学校論を展開するとき、最終的に「学校は一体何をするところか」がよく問題になりますが、アメリカのような学校は子どもたちを伸び伸びさせる所である反面、指導の目が行き届かないで不適応を起こす子どもをある程度は見込まざるをえない所でもあり、そのあたりがかなり難しいのではないかと思います。

日本の場合、学級を単位にした学校だったので、子どもたち一人一人の顔がみえなかった。子どもは学級にいれば、みんながなんとか引っ張っていってくれた。これは日本の学校の素晴らしいところだと思うのです。よく

日本の学校は学校つくりのモデルになるといいます。近代化の中では確かにモデルであり、このくらい安く効率よく学力をアップしてくれるところはありません。アジアの多くの国が日本の学校を真似たいというのはもっともです。ただ、安く効率のいい学校の欠点は、明るく自由で伸び伸びしたものに欠けてくることです。それだけに、ここで問題にしているような「楽しい学校」をどうやってつくっていくかが、日本のこれからの学校の課題になってくるのだと思います。

2●「楽しい学校」をつくる教師と子どもの関係

澤野　外国の学校と比べてみて、日本の教師と子どもの関係については、どのような印象をおもちですか。

深谷　教師の置かれている条件は、学級のサイズなども関係して国によって違うので一概にはいえません。例えばアメリカの先生は、学級の中や自分の受け持っている授業の中では子どもに非常に細かく声をかけ、めんどうみがいい。日本の先生と違うのは、アメリカの中学校では部活がありませんし、昼食はスタッフルームで食べて子どものめんどうはみません。ある限られた授業時間の中でベストを尽くせば、それ以外の時間は先生ではなく、一歩外へ出たら一人の人間に戻ります。

学校論、教師論を通していえそうなのは、日本は欧米をモデルにして学校を変えていくことは無理だろうということです。欧米の学校を見つめながら、日本の土壌の中で楽しい学校をつくっていくとき、学級という形は崩さない方がいい。アメリカでは基本的には学級はなく、まったくばらばらですが、学級を単位として、子ども同士の和をつくったり、先生が指導力を発揮していくのが日本の形かなと今は思っています。

3●フリースクールの可能性・将来性

澤野　先ほど、学校というシステムにあっては、必ず不適応の子どもが出てくるというお話がありました。最近、フリースクールとかアメリカのチャータースクールなどがマスコミでよく取り上げられています。そうした欧米をモデルにしたオルターナティブな学校が、日本で流行りつつあるようです。大学生と話したりすると、オルターナティブな教育にかなり関心を示します。このような動きについてはどう思われますか。

深谷　フリースクール運動は、基本的にはふた昔前の全共闘運動と極めて近いという気がします。フリースクール運動をしている人たちのいっていることは、一〇〇パーセント正論だと思います。それなら、そうした人たちに学校がつくれるかというと非常に難しい。フリースクールはアメリカでも多くの問題をかかえています。ただ日本では、財源的に難しいし、いい先生も集まらず、カリキュラムをつくるのも難しいので、結局隘路に入ってしまうのではないでしょうか。

　ヨーロッパについては、一九二〇年代のニールの学校などが有名ですが、あれは金持ちの子どもが入る学校です。大財閥がいればともかく、日本におけるフリースクールについては、僕は否定的です。そこまで時期が熟していないので、学校の中で変えていく方が不適応の子どもにはプラスだと思います。

4●子どもの扱いに慣れていない学級担任

澤野　今の日本の学校の具体的な問題点としては、どのようなことが指摘できますでしょうか。

深谷　何よりも学級担任が問題です。先生は教えることは上手でも、子どもの扱いがうまいとは限りません。教員養成課程でも、授業における教え方は指導しても、子どものハンドリングのしかたはあまり教えません。その技術を如何に高めていくかがポイントの一つです。

　八割くらいの子どもが学校において充足感をもてるとしても、そうでない子どももいます。その場合には、学級の枠を少しゆるめて、ティームティーチングやオープンコンセプトを採り入れる形で学級そのものを改めると同時に、保健室を充実させて心を病んでいる子どもが行きやすくするというように、学校のシステムを変えることも必要ではないでしょうか。

5●学校と社会の連携の可能性・将来性

澤野　北欧などでは、学校と離れた所に学校の先生とは違うスタッフのいる教育施設があって、子どもの自己表現の場になっているようです。日本でも学社連携などで学校を改善しようという動きがありますが、それについてはいかがでしょうか。

深谷　それについては絶望的だと思っています。昔は子ども宿や私塾を延長した形の地域の組織があって、学校はそれに乗ればよかった。ヨーロッパでも教会学校などがそういったものだろうと思います。ところが、日本は近代化を急いだので、土着の教育施設を崩していき、今は学習塾やスイミングスクールみたいなものしかありません。これから少子化が進む中で、スウェーデンの学童保育施設や、東京の青山にある子どもの城のようなものができてくるといいのですが。

馬居　そうした学童保育施設やフリースクールは、まったく新しいイメージのものなのでしょうか。

深谷　まったく別のものであるべきでしょう。少子化で教室が余ってくるので同じ建物の中につくられたとしても別の組織であり、今の子どもたちに欠けていることを群れて体験する場所になると思います。学校でもなく家庭でもない体験の場であり、これができるようになれば学校は楽しくなくてもいいほどです。（笑い）

馬居　日本的な土壌の中で、学校とは違うそうした組織をつくれるものでしょうか。

深谷　仕事を引退した人が自宅を開放して子どもたちの群れる場にするといったことはできるでしょうが、行政的にはこの財政難で無理でしょうね。したがって、現在の日本にあっては、結局のところ学校の可能性を広げていくというのがいちばん現実的な改革になるのでしょうね。

6●伝達型指導からの脱却

馬居　社会も子どもも変わり、近代化のための学校の役割が終わった今、次の段階に入るための切り換えをどのようにすればいいとお考えですか。

深谷　一九世紀から二〇世紀にかけては、知識の伝達が非常に大事でしたが、情報化が進むとそれがあまり意味をもたず、一人一人が問題解決する力を高めていけばよくなり、五段階教授法に象徴される伝達型の指導法は崩れてくるでしょう。日本の先生は教えることに責任をもちすぎ、いざとなると伝達型に戻ってしまうので、教えることにもう少し無責任になってもいいのではないでしょうか。

　できれば校長・教頭先生が、学力の中身がこれから変わっていくことについて親や地域の意識を変革していってほしい。そうした働きかけが極めて重要であるとともに、その流れの中で先生が教えることの重みを七、八割に落として、子どもが自分で動く力を育てていけるとい

いのですが。

馬居　日本の先生はまじめすぎるということでしょうか。

深谷　そうです。ちょっといいにくいのですが、日本の先生は精神的に貧しいような気がします。子どもを伸び伸び育てるには、先生が伸び伸びしていなくてはだめなのです。先生は八時前に出勤し昼休みもなしに働くのですから、実質的には三時頃に勤務時間は終わっています。ですから先生を早く帰すようにして、市民としての生活時間を豊富にもてるようにすれば、伸び伸びとした人間をつくることにつながると思います。

　ニュージーランドで約束の三時半に学校を訪ねたら、先生たちはみなお茶を飲んでおり、これからブリッジやラグビーをやるといっていました。日本なら部活や職員会議が始まろうかという時間です。日本でも先生を早い時間に解放するように行政や管理職がもう少し考えるといいのです。

7●学校と家庭・地域の明確な責任分担

馬居　先生が早く帰ってしまうと、自由になった子どもが心配ということで、子どものためよりも秩序維持のために部活をやっているようなところがありますね。

深谷　学校週五日制は、明治以来発展してきた学校が初めて縮小に転じた出来事で、学校が社会を引っ張っていく時代は終わったということです。これからは、子どもが学校にいる間は責任をもちますが、あとは地域や家庭でみてくださいと、はっきりいった方がいいのではないかと思います。そうすれば先生も子どもも伸び伸びできるのですから。

馬居　近代化を急いだ日本は、学校をオールマイティにして地域をも変えていったというわけですが、そうすると社会の仕組みが問題になってきますね。

深谷　そうです。すでにオーバーフローしている学校に、情報社会ということでパソコンが入り、今後も英語やエイズ関連のものが入ってきますが、学校はもうこれ以上はできないとはっきりいった方がいいのです。教育に限らず、これからの社会では、一つの組織で何でもやるということはなくなるのではないでしょうか。

馬居　一つでやろうとするから画一的になるということもあるでしょうね。先ほど、欧米はもう日本のモデルにならないとおっしゃいましたが、そうなるとまったく新しくつくっていかなければならないのでしょうか。

深谷　特にアメリカが参考になることは間違いありませんが、同じにやったら学力が低下することは明らかなので、それを避けながらどう採り入れていくかが問題になるでしょうね。

8●下からの教育改革の促進

馬居　現在の文部省主導の教育改革については、どうお考えになりますか。

深谷　正直にいって中教審の答申は、状況が大きく変わったのに一〇年前の処方箋を出したということで、教育界以外では評判が悪いですね。中高一貫制であれ飛び級であれ、子どもを伸び伸びさせるよりも選抜の機能を強めるものです。子どもが変わってきているのに、学校のシステムがついていけなくなってきているので、親の意識の変化もふまえてどういう学校をつくっていったらいいかというアングルがほしいのです。

馬居　日本の教育は善くも悪くも中央集権的にやってきたので、新しい改革についても先生たちが上からの指示を待っているようなところがあると思うのですが。

深谷　いちばん望ましいのは、アメリカの市ごとの教育プランのようなものを、市町村が考えて下から教育改革をしていくことで、これは可能だと思うのです。教育改革は意識の改革だから財源が乏しくてもできるし、地域のものだからおかしな点があればどんどん直していけばいいし、そうできるはずです。そこに親や先生も入り、市町村が互いに情報をやりとりし参考にし合って改革を積み上げていくのが望ましいと思います。

馬居　日本の教育は欧米に追いつき、今は逆に追いかけられています。中国や韓国は国に対する意識が強いのに、日本は弱く、これからどう生きるかという点にはかなり臆病にやってきました。そうしたことをふまえて、教育をどう変えていったらいいとお考えでしょうか。

深谷　いちばん気になるのは、子どもの生き方が不透明になってしまったということです。親孝行を否定したら何もなくなってしまった。といってキリスト教的な人間愛も回教的な不文律があるわけでもないので、援助交際などが出てくると善悪の判断の基準がない。新しい教育改革プランをつくるに際しても、学力という物差しがな

くなり、価値観の中核になるものを何にしたらいいかがはっきりしない。これからは理想とする子ども像といったものが必要になるのでしょうが、これをまた上から押しつけたのではだめで、下からつくっていかなくてはいけないでしょうね。

9●教育再構築の基底になる価値

馬居　深谷先生は戦前と戦後がつながるところを生きてこられ、戦前の部分を切ることを私たちに教えてくれました。戦後はずっと教育をつくる側にいらしたわけですが、今後教育を新たに再構築するとしたら、一体どこに価値をおいて考えていけばいいのでしょうか。

深谷　我々の世代は、戦後の混乱の中で経済的な豊かさを追い求めて、それなりに生活は安定してきました。豊かさ神話みたいなものをもって暮らしてきて、そこにゴールがあると思っていたら、ゴールではないと最近になって気づいたというわけです。ニュージーランドや北欧のように、進歩を遅らせても人間らしい暮らしをしていこうといった社会のつくり方が、日本でも必要なのかもしれません。

馬居　日本はヨーロッパが生み出した工業化や民主主義をベースにして発展してきたのが、ここにきてそうした国の根っこの部分を否定せざるをえないような状況になってきている。アジアの国々は程度の差や内容の違いはあれ、同じような問題に直面することになると思うのです。そのとき、日本は新たなモデルになっていかなければならないのですが、どこにその基準を求めればいいのでしょうか。

深谷　今さら宗教が価値の基準になるのは無理でしょうから、新しい意味での市民社会の倫理、お互いに寂しい人間なのだから共感し合い助け合っていこうではないかといった市民性がほしい。そうしたものをうまく構築できて、なぜ人をいじめてはいけないのか、不登校の子どもをどうして助けなければならないのかといった市民的な共感をベースに教育を考えていければ、人間的な関係がふえてくると思います。

馬居　そうしたものを少しずつ下から積み上げて、受験のためにぴんと張っていたものを元に戻していくということですね。

澤野　私は今、心の教育についての国際比較の調査・研究に参加していて、子どもの変容や価値の欠如といったことは主要国に共通する問題だということがわかってきました。

　また、理想的子ども像と関連して、子どもは夢をもつことが生きる上でいちばん大事だと思うのですが、そういうものが今の日本の子どもに欠けてきているのではないでしょうか。

深谷　情報化社会はモデルをもちにくい社会だという気がします。アメリカだったらマイケル・ジョーダンとかキング牧師とか何人かがぱっと上がるのですが、かといって日本の高校生のモデルにサッカーのカズや巨人の松井というわけにもいかないでしょう。我々は、子どもたちがあんなふうに生きてみたいという対象のない社会をつくってきてしまったのかもしれません。だから夢をもちにくく、小さな幸せという話題が高校生の間に出てきてしまい、そこそこのぬるま湯のような幸せからどう飛び出していったらいいのかわからない。これは教育よりもっと広く大きな問題ですね。

澤野　すべての大人の問題であり、社会全体の問題なのでしょうね。本日は、ありがとうございました。

養護教諭
知っておきたい
保健と教育のキーワード
■詳細カタログ送呈
養護教諭実務研究会 編集
★B5判・加除式・全1巻・本体価格9,800円(税別)(〒実費)
養護教諭のための実務事典！
保健と教育に関する領域から、養護教諭として知っておきたい事項をピックアップ。使いやすさを考えた分類と実務的な見出し項目で整理し、各分野の第一線のメンバーが丁寧に解説しました。知りたい事項がすぐに引けて、やさしく分かりやすい、養護教諭のための事典です。
養護教諭のための実践事例集！
養護教諭
―毎日の執務とその工夫―
養護教諭実務研究会 編集
★B5判・加除式・全2巻・本体価格11,600円(税別)(〒実費)
第一法規　〒107-8560 東京都港区南青山2-11-17
TEL. 03-3404-2251　FAX. 03-3404-2269